

ベニス東洋美術館の日本絵画調査とローマでの修理 技術デモンストレーション

著者	増田 勝彦
雑誌名	保存科学
号	17
ページ	60-63
発行年	1978-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003334/



ベニス東洋美術館の日本絵画調査とローマでの 修理技術デモンストレーション

修復技術部 増 田 勝 彦

昭和52年5月にICCROM（ユネスコがローマに設置している文化財の保存修復に関する国際センター）の理事会に出席した倉田文作理事（奈良国立博物館長）は、ベニス東洋美術館の屏風、刀剣等の保存・修復について助言を求められ、同館を訪問、日本からそれぞれの専門技術者を招いて修理を行うよう提案して帰国した。

ユネスコでは、倉田理事の提案に基づいて、日本からの専門技術者派遣の準備をし、同理事に人選を依頼した。その結果、刀剣研磨の永山光幹氏と藤本光豊氏それに筆者が、ユネスコとの間にコンサルタントとしての契約を結び、イタリアに派遣されることになった。

契約書の履行義務条項の主な部分は、①ベニス東洋美術館において、修理すべき屏風の選択を行い、②受講生たちにその修理技術のデモンストレーションをし、③受講生たちの作業を監督し、④修理された屏風をベニスに返却し、その保存方法について助言を与える、というものであった。ところが、契約期間の4週間という短い期間で、屏風の本格的修理を行うことは到底不可能なので、破損の軽微なものを選んで修理をせざるを得ない。しかし、それではデモンストレーションの意味もなくなると考えた筆者は、屏風の構造とその製作技術を通して、総合的な表具技術を知ってもらうため、屏風の材料・工具一式と工程についての英文解説を用意した。

今回のように短期間で製作の全工程を示そうとすると、屏風の骨（杉の角材を格子状に組んだもの、下地とも称する）にあらかじめ各段階の下張りを行った工程標本を用意する必要がある。そこで、約一カ月を費してその標本8面の作成と必要な材料の収集を行ったところ、荷物は40kgを超える重量となってしまった。

11月14日、ICCROMを訪問。理事長のフィールドン氏に着任の挨拶をするとともに税関への手配によって支障なく荷物を運ぶことが出来たことに対して礼を述べた。そのあと副理事長のトラッカ氏と壁画コース担当教師ポール氏の二人から、イタリアでの我々の日程が示され、その時ポール氏が、デモンストレーション会場の準備やベニスでの調査に、我々の行動を手助けしてくれることになっていることを知った。筆者が一昨年、研修生として壁画コースに参加しポール氏をよく知っていることを配慮しての人選である。

次に、我々はポール氏と共にローマ中央修復研究所を訪れ、所長のウルバニ氏に挨拶、会場の設営について、主任修復官であり以前に高松塚壁画保存のことで来日したことのあるモーラ氏と話し合った。

翌日トラッカ氏とローマ東洋美術館長のマッセオ女史に日程などについて相談したところ、東洋館としては、ベニス東洋美術館所蔵品の修理を計画中だが、現在は計画を練る段階なので、要修理美術品のリストや修理作業所設備のリストを作るための提言や報告を期待しているとの事であった。そこで、ベニスでは単にデモンストレーション用のものを選び出す作業ではなく、出来るだけ長期間滞在して所蔵品全般について調査することとなった。その上、マッセオ館長は、移動に伴う屏風の破損を非常に懸念しており、修理デモンストレーションのためにローマに運搬することに同意できないとの意見であったので、はからずも、出発前に準備した屏風製

作工程の標本が、ローマでのデモンストレーションの主役をつとめることになった。

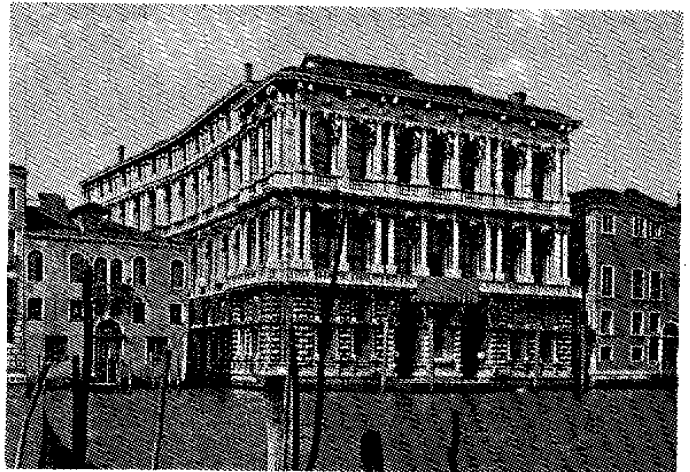
ベニス東洋美術館

ユネスコベニス事務所のルービン所長とベニス市文化財局のルジェリ女史が我々を東洋美術館のあるペーザロ邸へと案内してくれた。ペーザロ邸はリアルト橋と鉄道駅との中間、大運河に面し北東を向いている。二、三階がベニス市の近代美術館、四階が国立の東洋美術館となっている。館内は13の展示室があり、三階にある美術館入口から四階の展示室に至る階段の両側とⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ室には主に刀剣武具類が陳列される。Ⅳ室に刀剣類と共に陳列されている14点の屏風はほとんどが合戦図である。Ⅴ室は仏画や仏具・僧衣などが陳列されている。Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ室は、現在収蔵庫として使用され、未整理品や破損品などが収納されている。そのほか、Ⅸ室には蒔絵を中心とした漆芸品、Ⅹ室には東南アジアの品物、Ⅺ、Ⅻ室には中国の美術品が陳列されている。

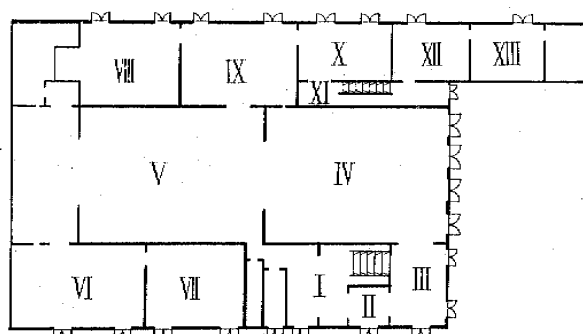
それらの品々は、ここ30年程の間陳列されたままで今日に至っているとの事で、甲冑などでは染織部分の傷みが甚しく、屏風には裂損が見られる。それに対して、刀身のままあるいは鞘に収めた状態で陳列されている刀剣には、ほとんど錆が見られなかった。

収蔵庫であるⅥ、Ⅶ室に保存されている屏風類は小さな傷はあるが予想したほどの損傷は見られなかった。また、これらの傷もここに収納される前についたと思われるものがほとんどであった。過去に、ベニスの洪水に遇って水を冠ったといわれている、十数点の屏風は、下方の金箔部分が互にくっついてしまったり、椽の漆塗りが剥がれていたが、現在はカビも見られず、画面だけを考えれば比較的良好な状態であり、収蔵庫内に収納しておく限りでは、早急な修理の必要は認められない。

掛軸はそれぞれの大きさに合わせて作られた深さ4～5cmのガラスケース内に懸けられた状態で収納され、ケースごと壁に固定されている。巻き納めたことがないので横折れは見られないが、屏風と同様に長期間露出したことによる褪色や埃などが目立った。また、軸のつけ際が剥れあるいは切れている物が多く、一部には天井からの雨漏りによるしみも見られた。



図—1 ベニス東洋美術館のあるペーザロ邸



図—2 ベニス東洋美術館平面図



図—3 ベニス東洋美術館 第Ⅳ陳列室

全体として長時間の陳列による損傷が見立ち特にIV室には西陽が強く射し込むため裂傷などの破損が甚しかった。

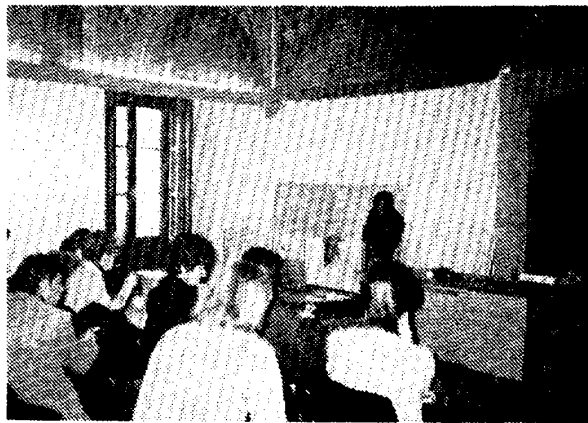
調査の結果、早期に修理すべき屏風は15点、掛軸その他は13点あることが判明した。

ローマでの表具デモンストレーション

当初予定していたベニス東洋美術館の屏風修理は、輸送の都合により行わず、11月28日から12月10日までの間のわずか10日間それも1日5時間ずつの予定で、屏風製作に関するデモンストレーションを行うことになった。会場は、中央修復研究所である。

講習には中央修復研究所だけでなく、書籍病理研究所、国立印刷物館、製本および古文書の州立修理所、エトルスク博物館などから約20人の受講生が参加した。受講生たちは、筆者が用意した工程説明書をテキストとして、屏風製作の全工程を見、一工程ごとに行われる説明で不明な点について質問をしてくる。初めて見る日本の表具技術が新鮮に感じられたからであろうか、必ず2～3人が質問をしていた。

講義は、まず屏風の骨格である「骨」の構造上の特徴を述べることから始めた。骨の上に最初に行う下張り即ち骨縛りと次の第2層目の下張りであるベタ張りとは、紙の繊維方向が直交することを説明し、骨の外周にだけ糊をつけ、紙をずらせながら第3層と第4層を同時に施工する簀張り、その次の簀押えまでを一日のうちにいった。次は、これまでバラバラになったまま下張りをしていたものを連結する蝶番いをつける作業に移り、この日本独特な紙の蝶番いによって屏風は表にも裏にも折り返すことが出来、紙と同じ材質な



図—4 中央修復研究所におけるデモンストレーション

ので蝶番いの部分的違和感が無く大画面を完全に一体化できることを説明した。連結された屏風にはさらに袋張りが施され、仕上げの紙や布を張りつけるばかりとなる。このように、7層に及ぶ下張作業の種類とそれに応じた紙の種類を見て、屏風の複雑な構造を知り得たことは、受講生にとって今後日本美術品を見る際の大きな参考となると思われる。

屏風の最上層には紙や絵絹を張り、その周囲に絹布を張って装飾し、さらに木製の椽で補強して屏風を完成させるが、料紙・料絹・絹布などは、前もって裏打ちが必要であり、この裏打ち作業がデモンストレーションの一つの山場を作ったと思われる。彼等の常識では、作業用板、物差しそして刷毛などの簡単な道具だけで、60 cm×90 cm もの大きさの布や紙に裏打ちをして薄い紙を接着し補強することは不可能に近いことであった。薄い紙に糊を万遍なく平均に塗布し、板上に展ばした布の上に皺一つなく置き、刷毛で接着させる作業が、数分間で行われるのを見て、受講生の一人は、何かと言えば大袈裟な装置を作る西欧的な方法に反省の気持を覚えたと言った。裏打ちをした料紙などを、一度乾燥してから再び水を与えて板に周囲だけを糊で張りつけ、乾燥後、板から剥がして平らにするという方法も、紙を平らにするのにはプレス機械などによって圧縮するという彼等の方法とは全く異なるものである。

最終的に受講生がこのデモンストレーションに対して抱いた感想を聞いてみたところ次のような返事を得た。日本美術品の表具法が複雑であること、紙による裏打ち法が多く目的に応用出来ること、簡単な道具でもかなり大きな物の作業が出来ること、刷毛の種類と使用法などは

一部分そのままヨーロッパでの技術に使用できることを認識したということである。

結 び

ここで筆者の示した表具技術は、日本の表具技術者なら誰でも行っているごく標準的なものである。しかし、その内容は、西欧における絵画修理技術とは、材料も工具もまた方法も全く異なるものであるだけに、受講者たちは、大きな関心を示し、熱心にメモを取り、多くの質問をしてくれた。しかも、この技術が単に西欧にある日本絵画の修理に必要なだけでなく、西欧の文化財修理にも十分応用できる技術であることを認識してくれたことは、大きな収穫であったといえよう。既に和紙が、書籍古文書などの修理に有効な材料として定着しかけているのは、周知のことであるが、少人数ながら受講生が和紙を扱う表具技術に直接触れて、大きな関心を示してくれたことは重要であろう。

ユネスコが今回の事業に際して、ベニス東洋美術館の日本絵画保存だけを対象とせず、これを機に、表具技術のデモンストレーションを計画した意図も、この点で理解されるのである。このことは、同時に行われた刀剣の調査と研磨のデモンストレーションも同様であり、受講生は、刀剣の精密な調査法を知ると同時に、刀剣自体の持つ独特の美しさと、それを引き出す研磨技術に触れることが出来た。なお、この機会を捉えて、ICCROMは刀剣研磨のビデオテープによる記録撮影を行ったことも、今回のデモンストレーションに対する現地側の熱意を物語るものであろう。

Examination of Damaged Japanese Art Objects in Venice and Demonstration of Japanese Restoration Techniques in Rome

Katsuhiko MASUDA

During about a month, from November 11th to December 16th, the author visited Italy as a member of the mission organized by UNESCO for the purpose of examination of damaged Japanese art objects in Venice and demonstration of Japanese restoration techniques in Rome.

After examination of over 100 pieces at Venice Oriental Museum, 15 pieces of Byobu or folding screens and 13 pieces of Kakejiku or hanging scrolls were found to be in need of restoration. At Istituto Centrale del Restauro, a part of Japanese restoration techniques were shown to the students through whole processes of making Byobu.